平家物語 十一

リ 伊5
1260
9

京都大學圖書

門 4 5
號
巻

平家物語第十一巻

兵衛乃すけ殿ハ使者我かゝされすけちん
のすけかくへはかりしてそのくいにそひきさ
ら就色しられけるの大事をひきいてしれ
このうへハよりことをせよわうせんとをせよ
はうせしことを奥人かゆかりひらけるを
ちとこのこつねをはいかゝふへし
とうめてまいらる奥人ともよりより

給はしかりきれい流ねこそよこそよき流
らん云ばそろし二而雪れいらよさんるゝり
てすなから云陽乃ほけ春ば而ひらした
てまわりく志りふさのこう小へたくまは沙
水そるしすいらせなりつねさこそやきるハこ
乃かしのちこよ大ゆく百てすなりひはちし
志うるゝ六七十ゆかれからそれくまれく
しこうれをたんろもかうへ江戸かつさい氏ゆのと

こと見れはまいりらんすゝんとゆけ也ハ月つとも
さるゝしもそそのさこめよせるれ梅ゆるれよ六
せんよめきよなりよなりかつさ然とけ紀ん流よ
ハこの志うさいとさうてまれをそくまいりぬと
おりひて其う圀中宇佐南瀛小瀛南原西
原東畔蘇ありからむさらへ乃りのことも平
家乃かうそしては君すきこもかうばいそしよ
せくこうれをうらもる志うさかふ掲ばいおひく

さて一万よさまて　さりふされらまさんとも
いまそこのさいとりあけられハ普賢の
もけ後さ給ひてさるよるしたらひまて
のこいまひきるまちさんの楽我んのみよ
おかゆとはこのさこいのけとも神妙なり
すこやふこちんよろへきよしいらせらるこ
のせいあひくして一万六せんよきよなりよ
りりひろはよ尾るくよかへりてもよよのらう

とりもよあひていひけるまこの普賢のし
け後ハ一字の大ねんありひろはよこれによく
法たせいをまつらしてむつひまいりさうんよハ
悦感していろきいそあひてみてとくらべ
さしあハせくさうやきことついせしことみて
とうのこまうんとおりひけるよさねひらを
もそめこまひけることぶ一まはそけな
く一まはそもいそいなるやりされ人まとく

よしつねはりよせられ給りし一定かんいはけ
給ひんしんむかし海さうとこう八ヶ国とうち
梅さらそ屋ってよし城よせかいらんとしけ
影よたりうこうたはかりこと残かくしてかくさ
らひよしんとおわりひて勢をそろへてよせ
うりきれは海さうとあまりよ院てきつりけ
影うと残こうりあけもとしこ面白衣きて大わう
はなはかいてむらひく海しれきやうよう

事ともといひきれはひそさとさるかしこ記
りのうそこの人のていゆそれなりよ将さう
なりいよと日本こての大ねんとふえあし
とそうらてりりろうまかそてるなくこともせ
めていあをおちくめさうえりゆる袖をとろい
ひけるさそ兵衛のもけむさうれ国とふ
さの国とのさかひよせうろ川のちうくつまら
む残とるむさしれ国のちう人次郎れ太郎蔦

西三郎ちう一統ハかく城をおひてさんとせ
忠清のせけの孫八郎いかなるにられきねうさ
の城をそまれをいくりしおはわうせや大
えはうけ山おあしへをして出口城さうしえ
さみて海りりうやとハうゑられうりれ
ハかまうさいさんちんしゅうよりよそめんちよせ
孫れぬ忠清れせけのこまひろうる平家
ちやくそんこまりの志んおねこ山とりを大ね

らんそみまんよきせてかつさのかくたきよ
城せんちんよりてさいそうへりとうさねとりを
いまうてのおんあいしやよりてそてろへきよし
きこゑ志うハかい志あれてあらうてれうこれの
かさふならぬさるよこのかな城わさしてあし
たう城うしろよあてかうふてまへよあてちん
とうんとおりふやとあわきれハこのきとりこ
をたつるへしとうとたのくりけるさらハ江戸

五郎これをきゝてあんないしや心うきかなし
とおもひて御いそく世よとのたまひけれハ江
戸ハ兵衛のすけの御きさきにすゝまいらんと
杉のひろれハさうなくうきさうをわたして
御ひき馬なりこのよしをうちわたして
むさしの国豊島の上たきの川のほとり
といふところにちんとるそのせいハすそよ十
まんきよとそ申へし八ケ国の大名小名やへつ

と秩父庄司大夫なといふやうなる一きうれ
もののことしれとうしとあらひハ二三十きあ
まりいは四五十き百きせんくよ白ろくとさ
してそあつまりける兵衛のすけにまつ
畠山六郎の大明神に御いり候てやと
ぬいくきんせい御そのときてけ山二郎
めのとのきさハの六郎なりさうけつよみひて
いひけるハ當時のせきんのありさま御らんせよ

ことはおほえす父左衛門叔父別当六らは
しかうのうへいよかりふへきものハあらね
ことも三浦の人々と一いくさしてそのハその
ときハ三浦人々まといひときねはま兵衛の
まけ後さんしやうしてこともなけかひける
ふすいさんせのやとわかふなりいまとらひけ
れいありきよ申けるハその事ハこれいなり殊
そらくいま申あハせんとそんかんにけるなりゆき

やよるおもひ姫ゝ南方よりわかれ事つね
の事なりかゝりし文平家ハいまのまゝまけ後
ハ源氏さりてんぬきみおりとこしぬきよまよ
みつから今ごとくれもいさんあるへしちとせ
ハさらにめて源いさられんれいつゝいされぬとおか
見へけとて申されハ五百よきにて白ちらく白
ゆくふくろをさして旗いりてきんさんよいへ
きよしとそ申す源氏兵衛の佐けれてくまい

けれハさんらいちて志けよし叔父あり志け
平家よりたいする乾中ころかそれとれとさ
あしうへよりとりつゝさるをあしやうる
とさせよりさこめてそんとろもよあらん
これくまひけもハ志けさてゆけるハこつか
にくゐいくされ事ハそんられもひ三浦の人
くよさいさんゆりわきてねその志さいさこめて
ひろしゆきまくわさそれい志給ふもは

ぞすきみ乃は事ともころ志よもは事を
とぞすつきよたこれ事もせんれ八まんよの
せとけひらい忍ひしつい(と)いろさせ給ひしと紀
志けさてろ四代おほら十郎たけつ手たらしめて
ゆいりてこのかさとさしてれいもつまうり
てせんちんうけくもうゆかのせけひらつ
いろせられいきちくいれ志やけりあらきん
たその多胡先生とのを大念へそよそせあ

御れしときハくさよ志けふうちてこれ
ならさとさしてろくじようちとそしぬき
きんしのれらあかくちうたいさうてんの
れゆハいなりよそその御浅きらもいとやすりと
ちんしやけもハ六條乃少けちうみ少けと
みみらよいうしあるへきとこハれ乃れハこれら
やけるいちさけ山をれりんさうみ何そえ
うけ山そらよれりんさう御奥ひさしさうらみ

りのとも極めくけうくまいりぬましう
もしうハちらくけ山をとうまおもしらあと一
とうしよやきれハ御ことよことりなりと
おもうれきれハちらくけ山よの結乃るハ御こ
とふちんしやとそろいちれなよよわうせさ
御いちれよりんてをうらさいうけん御ハ一
かうしせんちんをきんもへしすんちうくこよ六
さいろうハとおすへしとそあいうハを一とんつう

八されけるやそれよりしてそこもんのへ
たとははやかたへよせてむさしさうこの
ちう人ら一人とのれをも世おつる太郎の三
郎これをいとききてかなしとおもひて
平家のむかひよりありけるかあらそひ
さてあいさいのゆゑくよつなさりけるかな
小八かいきんし一まんよきそくとかれまへに
ゑらくけつきりしるとよ八兵衛のまけのせいにんの

おとくして世めきたるとなさかくされい仲よ
とりこめられてかなはしとそすゑいの一かくす
のをきりおとして二所こんけんにてまつる
刹てはらくのそくひかへりてかくれさへすけ
こありけり平家はやうよ子いくさもちをも
さらおいきましも兵衛のまけのせいのつね
さらようらてをそさすへしとそちかひ合う
のまこ小松のおい大臣のちやくしこれもりと

中にもかのひよ入道れしやてハさ給まれつく
きくありそそまれよりそうて四徳ある人
ときこゆる忠もりひ給ひ文入道の中忠もれ
これそ三ら八のえことありとこれ三人と
大ねらんとしてさうらひよハかりつみかくさよ
以下いとうさいゑもうさんしさんきひやくよん
それの世い三まんよきをもけらるかの二れもりハ
貞もりより八九代入道相国れちやくそん

小松のいハ大臣しけもりかれちやくなんな
りし平家ちやく〳〵正二いしていま出と
のみられとなよそておねんの忠ひハ
あきるゆゑしかりし事なり十一月よりも
ついたちせんきすし牒宣下
官府宣云　左弁官下　東海東山道諸国
応早追討伊豆国流人源頼朝并与力輩事
右大納言藤原実定　勅宣奉伊豆国流人源頼

朝忽相語凶黨欲虜掠　當國隣國叛逆之
甚既絶常篇宜令追討右近衛權少將維盛
薩摩守忠度參河守同知度並又東海東山
兩道堪武勇者同可追討之其中拔群有誠
功者可加不次之賞依宣行之
治承四年九月十六日　左大史小槻宿祢奉
次に中弁みつまさのあそんうけ給はるとかや
そりよしいてゝうてきれうて外出向大将ぐん

まつさんたいして節刀を給はるしんきなん
てんにしゆつ御ありてこんゑ階下にちんをひき
内へん外弁公卿さんれつして中儀せち会
をおこなはれ大将ぐんふくしやうぐんおの〳〵れいぎ
をたゞしうして是を給はるされとも承
平天けいの先蹤も年ひさしくなりてさ
とくしんとはかりつはのかんさた康和二
年十二月いなはのかみ正もりか前つしまの

かくみよりのよしちかころいろいろのくさめよい
つもれ国人下かりせしもいとうきさまにし
すいかりい給てかゝるのかみよ入てさらしき
のみひよろけさせたりけるとかや菩薩院の時
那年年中よ年御さうとしふされ国ある
のこなりよちうして八つうてあそうすうし
ころうへいさんとしとかりしてみやこへうられ
なりていぬとかさやけさそまうさんとするむらん

のきこえありけれハ花洛のさつきさわかしくて
てんたいよハ法性寺のたいそうさんいとし
めとしてあまたあさらんによりあつめきたて
うはいさされけるところに今れせんうたいさ
たかりむるんにく上年たちけ数時つかも
みきこしありて御さかとついきりのせんし
をうけ給るませんしハ御せ節刀を給る
館乃養なりて相撲節會の時方屋たれの

大ねのまいきなるまひとはゆとしのみなされ
かうとのよりぬかりいてけるよ大ねはさうし
ありてねらんはうられえんなき忠文なりとう
うへむかふみちをさうきの極く危うし
きまともあるへあまれり仲をとすらぬよ
きすみつせきうけしまうきうよき海りける
はきようられきけなるとふきのえぬきなり
小ちりみひて軍監といふ官なりよけけるよ

漁舟火影寒焼浪驛路鈴聲夜過山といふ
かゝる詩を思ひし出されしハおりふし湊まき
こしてえんなきやうみさとなりしてりゆきし
けるはこえりをてよゆきうとうちようら入
て戦せんしうけ給るよそ程くゆさしと
うされよはりそのかく抱てさことりや
こえみなりてそうとんをきうんとうるめたくま
はりて九字をきせんと下これとよろこひそと

いふ事なしすなはち太政大臣になしてたてまつらん
まうけられてときよ大なこん定しとおこなはる
上卒たちしきりにいさめけれは平将
門かうさんせそされその時陣座のさためにて右
大臣さねより公〔小野宮殿〕右大臣もろすけ公〔九条殿〕
くきやうてん上人座にまうし給ひけるに
九条殿の申させ給ひけるはたゝふん進て發向せ
すてにきたいゝける事はさうによとよ

いさもこちんにてねらんほとに發向せものゝり
くおりいてかつせんの思ひなして猶なりたる事に
はさとり一人く忠ん志やうをかこみなして事忠
文かんいふて座北ん廿ん也しん太ねらん布の
賞よこうわとなされすとも也うしよ惡しかは
賞やは忠文をおこなはるへしやうらんと申させ
給へれともその文とのあらん志やうわこ
なる人き事也けよ也かんまはなんと申させ

給けれハらんミあり忠文賞をハつゐにたゝこ
あられさりけり忠文うらみ化よりてあく霊
て内裏をめくりてそらかけりける天上も地も
ゆりうこかしける大おん霊をうけて子孫
実よりの末葉すくなく九条殿の御つことなりせ
給へとうけひて家をさうしとゝめてたえけれ
手跡めて給ける十九歳の二年廿日にみ
とくなりて手跡かうまてめてたく侍しかり

けしハみなるもおもひくしくしれ給はせを申すことと
し侍りて事ゆくまゝになりておもひしまし
事よなりあくまてめてたくなりまけるされはや
その文殿の御子清慎公もしそれそのつゝ
ある人も人かそなしと申九条殿の御子忠ハ摂
政まして家を給へそその文殿の御子忠ハみな
九条殿の姆まれなりまけるてうてさまた
いつく侍きし給ハ上代ハかくこそありけるよ

これよりうらてのはしひめきう北先脱之由
ありけるにおほりなししか可奉行とう時の人
々あひけるされは不れうけての時は九月十六日
かくしれ新紀をいてあかしき十八日たきみ
やこまてくされなりしか國へおもむきしかうち
うゆるやしまうつらうらふいたる由てかゝや
くはりそうち参りまれは見る人くせんま
むしといふ事をきゝ出えん乃出けかねこれなり

はあつらぬかしきれひさ迄大かひさくこそてい
えん比乃にしきまそいろへさうとよ北ま文ひの
いとをそしれよろひまもんせんおけならむま
へ大もく参ゆしきよいらけられきんふくてん
のそ成きそのりたりもりとし廿一みめてく
らもそられたりられいは息よかくともかてもおよふ
色まとも見し出文字しめりやうしあさかう
さは母さうれはよりこそてをくりける

りけるよかくそうにはかゝしけれ
あつまのくにのさいしけん神よりもちはやふるなかりける露 ハこよ
世中をくりかへりまかれはまたぬなり
わかれにはしのふにかゝりけんにこそねてさいしむしれはとて ものくハ
とふしくりかへりこれ人さることありつみれなきハ
むかしうさかしうけてのつひの事とよめる
中や女にかゝれかんつハ大ことのなかりける事にて
世にハいましめしそおもしろつすれかく

ハかりはなのりみなれなきハまやこの人大きく
ゆかりにやさしき人にてそおもしけるこれの
むかし此のかゝあはれ家をし此女につきかさらひ
よりてよるくかよひける事ありきりたはこ
のかゝるふひまてあひさるひはなくつまれけ
新枕よあたら夜と云事ありてみつゝかしこ
へわすれかりつゝひとなくいたきところよも
なけもはいふのりしまてまこともりてれ

くくとゐられけれとも内よりも人をいて
をことゝりすゝ給はなりしハ志らせんと
覧あふきをもちてつゝひなりしはなり
けるは女ありけれとさて内よりものひさ
はしまあはく野の女のすゝしもなみとこ
いられけるハあふき紙覧そてはらひやまれ
きりこうよさまもなりよなりてみちよ
女ありてあひてみてあふき紙をハつひ覧と

給ぬるそいさゝしかはのしいゆゑんうけ給つも
いよ〳〵かしこましこれのせよすゝしものはよ
まれさまは紙いそてこのあり人ともふうさを
おもひとしかくいられ去りけるをこれ心
思くかくちまとれなりさひの哥ちやさ
しくそおかしし十九日ちうき難よりそう
国へうち出りえんとかろせんとしめはくはよ
くらぬのたともあるやうなり中にもたゆらん

上達なりけれあそんそのみちをおりひ入けり
け給ふや年齢は六十ちかくよりかくもゆるり
よあるも猶りりその世は三まんよ紀有ゆう
つしかりにく良空法師名を給ておりける
あれのりまやてりけてすかりけくと給り
けりて仰しくそえてけるけんさいくせん
まんといふ事成二年あいくさうへ十七ねん
入庵しるの住くてそうし六十あまりなる

光治のきぬ冬れしろをとうらふる紀て始り（練イ）
あしたつきそてかり冬れあさつきはてくらお
かひりしてわしたるみちきされのりを法くと
みそくへしくちしていひけるはこれよりはゆかん
ハひもといなれとも大ねくんのさうあし筆無せん
まんきありいとかく政成寛名筆ありたし
みちどりりけん風さうはりといひてかいける
すやうようせよりなふりのいひけ給ると

たけぬきこもてんくれ人々よ御んしていひけ
れハみなよあるこ廿す九月廿二日よんかん文ハ
はくしもんはかうえんぬ記三月よもはかり
ありきそのよるしにや一万月の後てんか
よ何もりさるやうよ見んてかうようとも我
とよ安けきよなとあふはさんぬる五月た
かそかれ文の御事よよそてうらつきよ御り
御ろすてん御んよ行りよしちよんつねよあ

てゝてうていをとやうにうをそうしていてん
かせいとのゝきねん一円してハ雲禁后記のは
きそうれためなり一禄ん二とのはかりハ神
事よせいそう披露ハさるへき御ちん被就
うこうひうしとうた俊しけるはうよ八人うう
相国右大将むすめ卿下卿相うんくハ人と
うきこしこれさひハ素紙墨字の法け
きやしとうけて今めりせう記その御御

てんこうえんていまくたいほうりんてあうかれ
よりそんのれきんとんも御ちんりんとうき
こうしそのきんりんまいらく

蓋聞法性山靜十四十五之月高晴權化地
涌一陰一陽之風旁扇夫伊都岐嶋社者名
稱普門場効験無雙之砌也通顯之廻社檀
也自顯大慈之高済巨海之及祠宇也晴衰
弘誓之派廣伏惟初以扁昧之身忝踏皇王
之位今覬遊於廣郷之訊樂閑放於射山
之居而偸抽一心之精誠詣孤嶋之幽趣瑞
籬之下仰冥恩激懇念而流汗寶宮之裏密
靈詫有其告銘意殊特指怖畏謹慎之朝
専當季夏初秋之比而聞病痾忽侵添思神
感之不空萍桂頻猶轉无醫術之施験雖祈
禱非敢霧露不如抽心府之志重企斗薮之
行漢々寒嵐之座外椽泊而被憂濤々激陽

之前已遠路而極眼遂就杉檜之砌致展清
淨之筵奉書写色紙墨字妙法蓮花經一部
開結二經般若心經阿弥陀經一巻又手自
奉書写金泥提婆品于時蒼松蒼柏之陰共
添善利之種湖去湖来之響暗和梵唄之聲
波弟子辞北闕之雲八月雖无涼燠之夕廻
陵西海之波二度深知機縁之不浅抑朝祈
之客匪一暮賽之者且千但尊貴之帰敬雖

多院宮之往詣未聞之禅定法皇初駐其儀
弟子脱身深運其志彼嵩高山之月前漢武
未拝和光之影蓬莱洞之雲底天仙空隔塵
跡之處仰願大明神如當社者曽無比類伏
乞一乗經典新照丹祈忽彰玄應敬白

治承四年九月廿八日　太上天皇敬白

御奉幣ののち廻廊にはれにやありけるに
かけてはれまくよせてれ人くしくみれ日ひけられ

て入道にむかひよせまいらせしてひろうしけり
されける事はこの國をとらんとおもひてはかるなん
しよれとうさんあやしとおもひきこえしかとあらんあれは
されて入道ゆゑへかやらくれんそしはなく
文治とやは入しりけきうしめされけるすいこれ
ともかきこふよすそときはいる頭て候ひかく
まことしとやされきりされは上皇すこし
さいせ給ひてその条はとやすきりしれん

らいのふ事のは入道のかりやうは事をそれ
むきしいほかしめて二心あるみとおのふらん
ようらんいふのれとおほせられは世のの尽
てもくつあかく候はりて候はれりさていうと
かんうことゝんはなよとおもせ事ありへた
や候によあそはされて給はる入道これをきゝい
けんしりて上皇をうらいしたくまゐりてほ
ようあのりしへとてう大ねよかんもかよ

る日おはしまされけれ共ハ入道とりてまい
けよいき入く申さハ御つも北のてち人々
御まへにはいりくとそつねよりもいらよ
けなるき志くにく申されける御こ次はよ
のきやう御いられるかきれ人々つやくのの心
とおもとあまりにおほえつまりけるとかや十
月六日還幸ならせたまひてれ志んこう御
かくみれハ升蔽れれきこしみまりきり十七日

夢殿とおもふ所に法皇おまし給ひ御所へた
てわたらせ給ひける三条殿へならせ給へ
きよし入道相国申されけれハかくて御幸
給きとこしにくそありけるにこそには
右京大夫成範卿ハされけれハ此所にて
いましく此の御所をいてさせ給ひ日
むきこれたハはかなきのれかりれ申し
まや入道の事れおもよ御後合をとしるあかし

めされけれ
平家の討手にむかひ三まんよきのくん兵
をそろへてするかへくたしよ目代へて宣旨
をよりかけまれとも兵衛佐のいせいに
おそれてしたかひて相かりもりさる程に
兵衛佐のせいはあしからをこへてするかの
國うきしまかはらにちんをとりせいをそろへ
けるに二十まん六せんよきとしるしけり兵衛佐の

しけきせいにおそれくしけれは平家は三まんよ
きにてあまりし國はうち蒲原の志めくに陣
をとる十月廿四日のあさやあはせとさため
めらるゝよひうちれ國のちう人たけれにつよ
しれたる下人三河の太郎真辺か男にはしれはひに
かけりらて京上するに平家はせんちんかつさ
はくてきにかのかこうひとりてあやし
とて見られけるにへらの事あきかたとく

れあれとそふえかひてけり秩父重忠乃あけの
せいハいくら程乃兵ける真近男か方ハいくら
程とハ下らうハそのさけとさりハあらすて
し当時のせいハひきられ国ちゝへゆしくて
むさし乃国府へひしとつきてきこへしせんちんを
きせかくてつきてゆきてかくして八日九日れみら
ひまなくゆふもかハらもみれハむさしやしてゆとり
せいかつされかうこれをきゝてまけけるハたねく

むれれのあひさせ給ふハかりかなしかりける
りのハあらしとおもしいとゝ母を給ふるなけハそこさ
よ給りなをいまハあしかし城山して太郎され
三郎ちうけ山乃次郎とめしくてさもんまたれ
重忠乃あけよをもせいつかしとゆかれけるを
たねくんさて母さたいそり別当をねとり城地
てあせのかつせんの事をきさせられけれはつい
てよ秩父りそりのせいの中よりこの道禅のゆん

せいろうのいろハかりありなんとこれかれかれさね
りりそふもけいせいのゆみとおかしめされ
ゆうおくさまよハ八十二そく十二そく十にそくと
いるものぬきころおりくへちハ二人より三分り
そのことわらてんよわい二三十ほとかさねてし
かさまくいねきゆとのさねゆりおほえてさよ
も七八十人もゆらんしまらやりしつきよ
くきんさいの一ゆりなるよくきあしれのりさ

やものみりおほせくしまみるれすみへてとや
もしねしともしてつ子ともしてつしやもしてつ
ろいともしんあつらんつる事もゆあくれ
ハすいわるらとうも一人してはのれしま
いよひきつてみりかへよゆさねりのハはいそ京し
しやいうくりのいも八一人ておいねきハそも紙
かきありふとて七八人ひきしりそくしまさ
博労しまの京かいよ町ころりころかしらて

りうあけくそうりはなれらんはさう国のお
殊てのむしやそうふ士あてあてうもなハい
うそうおりて我むかひくきうんそうむしや
十人よ京むしや二百人をむきられけれとも
へとくしともおもしとは乾坤きんしけせい
八女まんよりきときうしはけうこれせいハらうま
三まんよりきうそこそくそ形禎よらえんうまも
な我はかん一まてうくかせうハ国のおん

おいしやまそはそのくに国のおんおいしそうは
みすおいそてられ当ちはおハゆしきれたる
にくくしと京よりさハりやかし抱て南は
きんしよよりきしう陸人くれ名字和う
け給はさてきくいうねともおもしすはいそき
けれ下向あてむさしさかくいう世給て南国
のせいをめしそしてなる井のワうまらんと
とうまてでき我まうく鸚給へとさい三戸はし

ときこしめしつけて平家のおちけるは西国にせい
をさしむけ給ひけるうへはこんとのいくさかなふましく
くらんもしらんかくてはゆくへはとてもきそとりわらせ
いくさをせしとおもひよらすすさましくてもも右大将
よのれもんありさまみくらへはくちおしくもせんたん
小入くいそきいと海を給てかへりまいりてう
ちきよつきまつるへしとてせんきせいをひきて
けて京へかへりぬありきりたるらんへきて聰して

心よりくおもひたちれきれともうへにはさねのり
うみき前よはいくさはせねかいさ給は屋くく
あしかゝ山城ちうこて八ヶ国そていくさせん
とたねらんきちはうやらせけるとてきまゝ
けれは八ヶくれつはやのみな平家おもけはおこて
かふよしきてはいくわるかれよとともてなしへき
ふかもいはくかんてすみれせいはこもんよふれと
はやくへとも事よあひぬへきにとの二三百人よ八

よとすきらしはうなく山城からこしては
ゆくあしく之しきらしかゝ城まへまいて
かせの縁給てせいをめして又それそうりはめ
とりまれハ大ねらん共めいをうしく事やある
こいられはれもそれは事共やうよらはふく
いく城ならん給しは入道とのお目せよかんせん
乃ちこいハうてきようちかうひやうん小ちさ
かちせ給へきりし徳さしくわかせんきくそのこ

とハきこしめしひきん物とこそすまさり
けるハ一人うけいけるをとおよそすきろう城
ゆうへてめ城ん西に世てかさねをあいまう
け給雑よ十月廿二日大将のせけ八うて治
せいをうるいてあしかうそうして本せうハまあん
そとて治ハりのてか七城ちうしまりそうてひ
らう乃れあうへあいらして馬上二十八まん文
せんよ紀とう七條しけるそのみかいきんし

小一条次郎にてありしかともことに二まんよき
にくき兵衛のすけよくりける平家のせいにつれ
ぬけつゝひきあひてひろうりうちて尾せき
けるに兵衛のすけつかひをたてゝおやかたき
とうさんけにあふ事はきかねてありつるに
事にくはかれそうりはなる事によろこひて
むしはあとにいろきをさんに入らくはせ
いひをくられうりつかひいそわしき新先生に

ぬりのふりあきせたはらの八人うちてむかひ
て平家の人々のちんを次第にくれはらりけ
はに人々まんのまくうちあけていられける
逃ともおなし事いふ人ありしかれとも其事はい
かやうなはへきろとあひきろつとろによる
ふそよしすかのつかひとかうめて一くによひ
をきりてける兵衛のすけうれしきてむ
しよりしまいくはまれ牒使のくひとき

は事はまさしくきこえそよ平家はとてよう
むつきよりしのさぬひけ也ハ軍兵いよ
く兵衛のすけに同伏しまうりけるを
さはりしよ兵衛のすけのうさにハ九郎よし流
祢あふ志ゝよりきまうりくり経れけるハとを
けいよしちらしつきそ夜ふすかゝつむしゝい
まの事ともかまりてあいさうひよなみさを
みちもけぬきまひりはいこ乃ちよねんのわ

ひさしくたもちハおとよハきてつゐもそのたか
そいまさく兄弟まうりつゐにいよしてきうんを
へきとおもひ給つゐさいせんをせきまうり
給へハこしのいきかへり給つらとおもひてさ
ましくおほしんはかの項羽ハ滴をとりて秦を
滅し事を思ひまうりきいまハよりそもよし
源孫をえんまうりあふみ平家を誅伐して元文
のかんいとそうけさうへきとうぬ給ける高祖この

かつせんの事をきこしめしてひとくむかいでゝ申ける
ろうとそうらひけれはゆゝしくかんし申
御たちん大納言いけ道信をはしめ三条
宰相しきん三位入道とこうせしより始
こふハ安清のむけハきし婦もんとぞ申しき
さんぬる承安四年ちるれうからやことを
いてあふ志ん人ゆりそうりてはしよひて
むかむしれよしゝ残りもれたる事にかれて

あられをいとしくきかく御いりけるもかる
ちりゆうやむまそうらうとうふいてるまそ給ふ
しかそ羅まゆしつハかく御いりゆ志う給て
ハいつそらうとう一人もあひそしくべき十よ孫
むつ孫かれつりふしめうしいまよしてそらし
沈そしぬるも　あわしもんとてうり九郎よしね
ハやまされけも
其比日本をいふ西方此やあわせとうてやそ日し

それより平家みん氏けんしみたをかんや
ましられ、かたり大のみ侍る事の始まといひ
さとしはらいひいもかいみ竜のりても海のま
さこのこくたりひしみなこきてに二方ハとく
きのかなやめし一方にこのりいまらかなこのせいかり
りはきんしれん氏ゆこへ侍るうちよわいつ
きしこてめきさうけひりはむこよかしれなまよ
むもぬうはこりそり二もえうち返しきちゐ

すはむこそひてしかりけりられをきて
かさねもてよせて時をはらはとおめひて
うちめてまちられさねよとこうものですゑ
を平家のそん氏もれさねよと海とひわち
けりもよろいへきてれこもかふをとこをやハ
おふられともゆこをこしをわはいいむま一ひ
きよ二三人よりつれてたむまとらふ事を
たくわらんとすあつひいはみれむまのりて

あそりけるハくはくとかくはすのもありう
なりまあハそてさつきて一人あれつるも夜の
うちよみけるかりけり夜やうくあつきこよ
なりもそてきんしのことら九八まん六せんよき
のせいをそろへて時をはつる事三ヶ度なり
こう八ヶうくとひゝして山のかせ外かハのいろ
くつよいたるまてきもをけし心地ゆとハさ
もといふ事なしわひしみをいふハりふ

かりけれとも平家のかたにハ時乃声もあはせと
はやくおいともせられけれハあやしうて
人をつかハしてみせられけれハやとしよ大まくと
もこうしもよろいをきてまかせてゆらや
くそくいそりとる事もなくすそなて人一
人もみえさりけり去夜の火けされたりて
この事よりともかつこゆるよあうし衣矢と
ぬきてまそてまいり給けりかれこれひとりの体

ひとあまたありけるとかやそのころかいつう
の桂女とありうしてはにくりてたちいけるハ
かゝみの女ハいと深かりしやくしにまゐり世年能
十五日ごとに入まゐりしこれかりいけるおん善を
ものふきうさん入がひさい人め給ならく尊よ
かくれてぞ入けれ之御んふきことうつしてさ
ありし時ハむかしよりこれかりの大せいまはる
きゝめしんをとよいをおきんへいらつ尊

かくれ時けんしう年録あそうりあれもしいわり
しかるをこれから十ぶん一ようだをおよいなりき
あれをひさしくまかりハおりてそむらふへ
きゝていまうけなひしもんをとりてし
祖まや一もいとうるにのかたをとんとそう
れることふおところ乃て御情なけ乃せい
あゆくあるんときておくしてかけのうは
我のあひもい人ともゆくきんしれるへつきよ

けもいはく雲居のもけれせいかさ船のよ
りやうきみやこれ人とこれときゝてとけ
はいむしより物せすなほ見えすけと事
いへつてくうりそれれやまもうしてきよこれハ
きくにけよこうあんそれてわかせぬうちての
つひやしもいさしこめにけれはあるほとく
し内侍ともろくしかる命しきここんなと
一ちんやかれぬもいさんこうまくからせとてき

く人にはまりしきそうしけるもいは文いはある
わさうしりみうこらさかやありけむ年ころ
をひうやとよみうらてのちねとハこんの
もけとらふ物のちねとハむかりとらへは
こまうとそうりあいせそうくまよう見えうりけり
いやけるむかりいなさへくらんとう彼さのむをけとおとして
かうされつくたきよう志うこやうつうりてうく
よようくたりけるとし

かゝるよろいはとてれほとみかあれ衣さてきよめちのみなため
なりけれはなけれるにやありけんけれなとつかさとりかい
まうしきこよりおんなをいうけとひけるはかくよ
みゆりけれはやきよにけのしまはやありけり
けむ高時なりけるしころ平家をいあるこそ
むかしひさりしかはその心よきやうにやあ
まいらん入道相国よりたくらとしけりてこん
のとけかねにきういらしまたなりしてきよ

とハいひときこえんところのさまひけれはさき
よ始こそよ助れところのあれはていはよちんを
ともかくいはらしいませしとてあらひらは
うとりかし志あれらん宿より国のト人をく
なふてか屋ものはなさともありけるところへ
ひときこよとづくうかてひゆりてまゐるはさて
きこよ十八のうしとおほしゝとも夜よねを
人ことりてはしとよろりのもとへまいりしよ

つゐにかゝりあひて入てかためてんしよ
てこみのくはかりけんへいられかゝせんとし
めぐして大小事に一ともきうん給とられ
御いとおしく思す又やくとも心なる事と思すに
むとせう国へくたしめて御かりそくしそかなは
ぬらくとうつゝおはるこそはかて事とも思し
しらすよくて御いありあくへしと思はしと
申されは入せう相国けよけりやはかりしきん

ねとの給はすうてきよかむかうりよそよはさ
てらり
十二月廿二日女原大将えん上つちて内裏に
あらはして主上わたらし世給とし遷幸
のきし給よのつねなしおうりきこえしこ
そうしは大嘗會とけおこなはるへきよしきこえしふ
議定ありけともそのさたもなし大
嘗會は十月の此忠に東河に行幸して

御禊有大内のきたのに斎場所を定けり
て神服神膳をそなへ大極殿の龍尾道の
壇下に廻立殿をたてゝ湯をめす大嘗宮
をつくりて神膳をそなふ清暑堂にして
神宴あり御拝あり大極殿にて大嘗会
なりし豊楽院にて宴会ありしかはこの
ほと内裏にてハ大極殿もなかりしかハ大嘗会
おこなふへきところなし　豊楽院もなかりしハ宴

会もおこなはれしかはさきおこなふへきこ
ころ法やくなりけるハ新嘗会にて五
節ハかりおこなはれきよし誌にてはさためられけ
也ハ九八日にてかきりて大節ハかりハおこなふへ
は新嘗会のまつりハなすき京の神祇官
むしてそれをおこなふ大節とやハむかし
きよらハうちの門によしきの文にてそれ四種す
ましてかくいまし楽を想しよりんし給し

つハ神女天よりくたりて乙女子と乙女さらひす
とかうを織し女さらひしもそのかうをとと
めて思ひこそひ給て廻雪の袖をひるかへしも
されとも義のためしめらす
きうとハ山門あんと称しくて是すれハ太元
日吉の神よ織さらけそまつりて下添しれ
人春日の八れ榊をとりてまつりて上添を
か原の事もうはさし新都ハ山のかあり

にかさなり行道に然くして称へくつまた
れハやとうしとて還都ハ事ハ太政
入道ハしひにされけれとも清寺諸
山のうへきせん上下れみけかうへ山
門の衆徒三つとまて参状をとてけて
天聴をおとろかしたてまつるまことの状
よいらく
延暦寺衆徒等誠惶誠恐謹言

請被特蒙天恩停止還都子細状

右釋尊以遺教付屬國王者佛法皇法之德
互護持故也就中延暦年中桓武天皇傳教
大師深結契約聖主則興此都親崇一乘圓
宗大師又開當山編百王之須其後威及七
百余廻佛日久耀四明之峯世過三十代天
朝各保十善之德蓋山洛已隣波是相助故
也而今朝儀忽變俄有遷幸是惣四海之愁

別一山之歎也況山僧等峯之嵐雖閑特託
洛以送日谷雪雖烈臨王城以継夜洛陽隔
遠路洪還不容易者豈不辞姑射山之月交
邊鄙之雲哉若變花野者峯留人跡乎悲哉
数百歳之法燈今時忽消于万輩之禪林此
世将滅當寺是鎮護國家之道場為一天之
固靈験殊勝之伽藍秀滿山之中所令磨滅
何亦無朮沒之愁歎乎法之滅已豈非朝家

之大事哉況七社權現之寶前一人泳覲之
靈場也若王宮縱遠社壇不近者瑞籬之月
前風輦勿隙叢祠之露下鳩集永絶君象詣
跡禮奠遠例者非無冥慮恐又殘神明恨歟
凡當都者輙不可弃勝地也昔聖德太子記
文云所有王葉必遂帝城大聖遠矜雖忽緒
之況左青龍右白虎悉備前朱雀後玄武勿
闕天然吉處不可不執彼月氏之靈山則攀
王城之東北大聖權協日域之叡岳又崎帝
都之西寶護國之勝地泰同天竺勝境久拂
鬼門之凶害所謂賀茂八幡比叡春日平野
大原野松尾稲荷祇薗小野鞍馬清水廣隆
仁和寺如此之神社佛寺大聖垂跡者占地
建護國護山之崇廟安勝獻勝軍之靈像遠
王城八方利洛中万人貴賤歸依從來為市
佛神利生感應必然何避靈應之砌忽赴無

下之境武誤新建精舍更請神明世及濁乱
人非擇化大聖感降必不在欤此等靈壇之
中或有諸家氏寺務不退勤行子胤相續自
與佛法之所也而愍從公務乍慈捨去豈非
袮人之善心之悪乎諸寺衆徒各從公請之
時朝参遂晝暮帰練若宮城遠移往還云何
若捨本尊若背王命左右有憚進退惟谷夫
憶有國豊民厚與都無偶今國乏民窮遷移

有煩是以或有忽別親属企旅宿者或有絶
所私宅不堪運載者歎之旁已動天地仁恩
之至不顧之手諸國七道之調貢万物運上
之便宜西河東津有便無煩若移余所豈有
後悔欤又大将軍有西方角已塞何背陰陽
忽遠東西山門禅徒専思王神安穏恩意之
所及争不鳴諫鼓俄有遷都是依何事乎若
由凶徒乱逆者兵革既静朝庭何動若因鬼

物怪異者可歸三寶謝天災可施育万民資
身德何動本宮故弃佛神固遠之伽剎企遠
行態於人民悩乱之怨抑退固之恐歎拂朝
家之天厄從昔以来偏山門營也或大師祖
師擁護百皇或醫王山王擁護一天或恵亮摧腦
或尊意振劔凡捨身事君先也我山古今靈
験載在人口今何有遷都欲滅此叡哉竟雲
衆目之耀一朝天枝帝葉之傳万代即是九

重右並相須力也豈非慈恵大僧正加持乎
聖朝詔云朕是右丞相末葉也何背慈覚大
師之門跡忘前蹤不顧於山滅已耶山僧之
訴訟雖不必當理且以有功労久為蒙裁許
也未或於此背旦者非獨冗徒愁且奉為聖
朝並又為化民哉加之於今度事抽愚忠一
門園城雖相招仰勅宣万人之誹謗充閭巷
伏祈渉須何因盡勤労還欲滅此叡運功蒙

罰豈可免哉縦雖無別天感只欲蒙此裁許
当山之存亡只在此右故也且請天恩無
廻叡慮被止遷都三千衆徒等胸火忽滅
百千万衆徳鬱水沐忽流衆徒等不耐悲歎之
至誠惶誠恐謹言

治承四年七月日　大衆法師等

これによりて十一日にはかに都帰あるへしときこえし
けれハ当時都をいやしみて旅居ありのひさいを

つき悦ある人ほ山門の訴詔にもしといへとも大
事をも小事ともさらしね事なりそれハ
なるひさしひとへハなれとも聖代明王もかやう
の裁許ありけるにいはんや此比の道理
なりて無三かやうにみえしほとにかやうにや
入道相国なりともいかてかひきかへさ（へき
これをきいて右京によりてさひしさとおほけ
きける人々も悦ふ事かきりなし　九二日

新のんかりしと出給ひあて心うき都へ入れかうか
都大かたもつねよハはけしき風新都のていハ文室
早傾よして城地そりうち一ハあくき所
くたりて風波やかましすさまし卯海なし
ともけりしかりきうとへ還御なるへきにてあり
けれハ子細におよはす　廿五日主上ハ五条内
裏へ行幸なる法皇六はら池殿へ還幸平家
の人々太政入道以下みなかへり給ふまして

ほかの人々ハ一人もとゝまらす世をもあり人をも
かそへられしともからハみなのほりけりされと
都ハことくしくはえてひそしてこの六か月
のあひたハ造立してねたましさハけしくとそ
しひよせられける様よ又物さハかしく都かへり
ありけれハ何のかへりみもおよハす古京へのほる
うれしさよとるものもとりあへす急さいそく
をとこひ遍そよおよハす海をとひかけりされは

いはくにおちつきていくにすゝしいともおほし
そのほかきたひらては山ひえい山かと
やしろてらのかすかきりまつりて廻廊や堂
ろのかいらんなにはきらと角りてもあるへき
人ゝおかしあいけはとてもかくても人はかり
御ハするかくさせ給事となし十二月一日兵
らんのはきうりにあきれいはしまゝ奉幣
のはらいをしそうは当時あふきの国は凶賊反

そふさくあはて大神宮へのはけいくにんに
あさハそして申しつく神祇官にとゝろ討に
れつゝひ都へそりれありしれちふる国堂の
のきんしいとをいしかつまありて国くれはいをも
のおほくなくひきるてせいはちゝにあちまらひしつ
きにかりきちるれあふされ国にもやすくかし
ハきなといふあさ道源氏さへとう国にのはりに
りしく世はをとゝら道をかくめていまは人を

ともなさす
十二月一日にこれ国の西人ゝて同ねくわんしゝ帝
義をちゝり申ほかの帝義ハ故さまゐりにまよ
しこともり平かんよりこりまハ一分て一姓のおこゝろ
去ル永暦元年まで一国になかされて二月
残を分り得禅に関東にむかんかこり来れハ
同意れうこひそてかの国れちう人々すいけの
次郎きうにつねにお召せてちう甘るれまよりと

うきこしおなし月いよの国ちう人河野
大夫を智みちきよに残けんしよかよハし
て平家をうしき国中をそんもいし正
さいそんをりとよくつをするよしきこしけ
也ハひしハこのて国まて源氏よちこられ然
さいこくさへかて也ハ平家方よおしろきさハき
て阿波さん岐大夫ちけよしひんこの国ちう人
ぬかの入道高信ちやしよおほせてこれを追討

せうはみちさよハ何めしくなかりしをきちらけとも
よもちうし成かはとはとの御きれハにハかによ
る信かつしかてよかりてうけれはなり
三日たち六波羅ことはり小松かねもりけり我前に
信みちとりさ海のうへゆきかりうちまかせてき
ありたかねきうねちくせんのうへ信さよりけ下
乃らん公又そうてへうゆうれその勢ハ七千よ
きろしのうむしやともよりくしさうりきれは

その勢ハ一まんよ騎にてけうすけ下かしハ
本きうひよみのかなりのきんしをついきのさ
めや時日山下ゑらんしやよし海さかしい本さん
官代よし亀をせめおとすやそみの國へ
こゑておかりれ國々そ討すゑよりしきえし
かハ太政入道すこしきそく御ゆりてうみて
られけれ
南都の大衆いまゝと三間ましうすいたく信う

さす公家よりもれつかひきなくよそさ
されてされハなふ事を背られきんしれ
むよあるハいくらひを奏文よろおよいあと
おほせそされきれハへられ所領をすてきま
より入道よあひて世よしらんとうたて一らよ
まけるこれもうて事よあり次入道相国よ申ハ
かくしけなくも当今の御外祖父としてそれ
よおこしをそてかくいゝ出家をすゝけるとあさ

ゆしをよろハなんとの大衆よもてんまのつきよ
ほなとうみしこものわれやをれハわさまひ
ともよ〇くなりしかりこの御慎も兵敗之
道やといふ三井寺より牒状をつかハしけり
返牒よ平氏のせんその瑕瑾をそたゝし
てつれさりしをやとうね事よ相国おそれ
うりきれハせひあるましいうき官位をはな
りして自訴をせめつゝゆへきとふさゝありて

かゝる所に備中国妓尾太郎かね康と申さ
ぶらひを庭まもの介のかんひいは使者となし
て三百よきの流ハものをあひしてそこなら
みす流浪一せうかられねとしよく蛭坊てかね
やすかりとよしよせてさんくによから（し）
てかね康やすハ惣のこらず三十六人から（い）
をきりてするさみのいけれなくてよひけきり
きり亀やとハ老すみしてすけのかうそのこら

なんさいなくさうさうすす又大なるありしれ
かしらを流りて大政入道きこよりかゝへか
ありとめいはかゝそてきらるゝのたまはくあら
こらうらけかくきり入道これつてくきらてや
をかゝね事やとそて三せんよきねんそまんへ
さうしむけ給なる大ぬこのよしをきゝてなら
さらちんゆやちれ二みちきりかさねて立る示て
ゐ城をくゝせうしへて先か中よゆらやをとし

いしかはらよりいてもちらけり
十二月廿八日あけびのれあかんかんとへころかり
す三せんよせ城二てよせけてかしさらん
まやらへしふた気らくさらうち抱よ宿させられ
ひあれとも三せんよせみえん共るよりてさ
むくよかけうちまれハ二の城にくらかけらく
金かれよりその中よ坂田尾角兎とてき
こゆうあく諸ありうらめとてもゆやとてし

七大寺大衆大きよかうゝをなし落よのなし
たらしられつよゆゝたやゝやゆきゝゝなのて
きしよそうけとりをいろいろさす百とらると
ともくやなみ怖きゝのなりそのうけ七天
ハうりや禍衣よろひきてゆよりしきれいと
おとしれらしきまきれうへのかはハおとしみよる
いかうよのてきく三尺八寸れ太刀うき二尺九
すれ大みきくなくこそけらうりり同日夜十二人

なるにこそあしかろかるしきうち世よ人によ
なそれ給せ手掻門よりうちむかへりけるのちに
忘れしさへうりなりはおもてのもんへ参る悦びきう
まそうさまへよなりされともたせいのしこつをさ
れハに形見一人さうけくおりひられともかひなし
いそおいそおちよなり忘けひらあそんはうち
けるのとりけのまへようち立ちて自頭ややみ
きらしふらん奈の中よりは国なかは見け

次良太夫俊覧といふものそを召りてさい
松あしこふ南方之城をうしあふりてる仲よ
うち入てかさ北のこめりなりはおぼしやうらはよ
いそうけてうれを召くうらそしおりひ名をし
あしむ祖ののめのハ折しきりくうちしよ忘ん
あやうしそうされよなり出ちらるもありき
やしふよかるへはそりかうハよし猶とあかハのうへ
あらうせねきやうしかしかめらねらしそう

志ゆくしやちこともねかいあまたなとそ
山階寺のてんよりれう人は七百よ人かくれのほる
大ふつてんの二かいのとこしれう人は六千七百よ
人あけぬかりよりかゝる所をかせしとては
しをひきそゐりけり十二月のよるにてありけり
りふし風はけしくてところ〳〵にかけたる
ひ一つにもえあひておほくのきうしやうにふき
うつる興ふくちよりはしめてとうたいせう

さいこんたうなんゑんたうまて七ちうれにけり二
かい楼もん志ゆらうきやうさう二めん僧
坊にめんゐい廊ゐん興ちうあつまるやし
なまてやきくのちかしれ風いよ〳〵ふき
けむハ大仏殿へふきうつりもえあかる
ちうてはあさましそてまけのあるところに一千
七百よ人れともかう叫喚大叫喚天をひて
かしらをうしかうをあたにしそて一人もたすかる

へきやけしよりかのむかし大城乃そこ
ふさい人ありこかるんもこれにハ正行しと
ろうえし千万の鋺ハ佛の人に施かる守
護の為ニハ其状にあらりてさいのちなりし
あふ為しの三百倍ハ二千大に御しまそ
志りしけりかなし朋具なるハ浅海公の
流るんなるらの一萬のならる也元明天皇
の御宇和銅二年庚戌うしこん遷らせられて

よりこのかた星霜千百六十よさいはなまへり
こうえんなりにおいしまず佛ならうさいしふよ
の枕加辺の深さいえんをしおもしろき法事とん
涌かいの釼世ゐ盛りてよひら丁四面廊宗
檀とまうへ塔二階の棟九ろんゐにかやき
二基のそうともあしくりりとあり付け
瑞ゆうかあしかれ
沈毫縉紳のなりめつ乃きといふ名とかれ

かりけれそのところ見わたしつゝ山階
三面の僧坊には文殊の花開不開春日野社の
社壇には法とうかくるこゝをなし仏さうき
やうらんのいらかは大かん天王のまもりこゝろ
ま代にのこれる境をうつしのとしおとうは
きんろうはなれしむねをふかし給りんとうかく
もかりけり　東大寺は常在不滅實報寂
光の土のうつし佛とおほしめしいそいそて

秋篠の初成道のきしきをうつし天平年中
に聖武天皇おほしめしたち高野天皇
大炊天皇三代の聖主にて作らう精舎を建
立し佛像を治鑄しましまして供養し給ふ
もん僧正婆羅門僧正律師良弁僧正行基なとの
鑒真和尚等の菩薩聖衆道導師咒願
として供養し給ひてよりこのかた四百七十
余歳になりぬ金銅十六丈の盧舎那佛

烏瑟高くあらはれて遥天の雲にかくれ
白毫あまねくみへて万徳の尊容を模
したまへり尊像八万四千の相好の秋月光を
の雲にかくれ四十一地の瑠璃の膚の光りも
なしく十あくれ風すこしまかりハ中天にた
ひまなく猛火塵々にみちこそりみちには
やみをさらてちにあり法界ハわきあひて流
られとしもの あらりに見へそまつるとのめも

あそうも沢るるに法えきく人もなみさ
とたつさねハあらりけり瑜伽唯識両部を
しめそして法文聖教一巻をのこらずまち
てうりやにあまりも天ちくたんさんにもこ
ゑたらのかまりめりハ四そのあつへきされハ梵
天四王龍神八部冥官冥衆にいたるまてお
どろきさハきさ法りんとうをけしし法相擁
護の春日大明神の露れ多かりみさ山の

あらしはけしくもふきしかは海よりあかりの
いまやくるところの大会東大寺にハ大仏てん
講堂金堂四面の廻廊三面僧坊戒壇尊勝
院安楽院ちんこんゐんやくしゐん東南ゐん八まん
宮けいのやしろ寺内社興福寺にハ金堂
講堂南円堂北円堂西金堂塔小円
たう東金堂四面廻廊三面僧坊観自在
院西院一乗院中院松陽院小院唐院松の院
伝法院真言院因城院皇嘉門院惣宮一言
主社龍花社住吉社鐘楼経蔵大湯屋（此外不焼）宝
蔵四字社外大小諸門寺外の諸道ハ不及記
しるへきところくハいむの御堂長者乃出塁
北面乃廻廊門楼一坊経蔵章疏形木菩門社
住侶もやけけり此外弁院龍花院因
坊南三字禅定院新薬師寺春日社四所若
宮社なとそわつかにやけのこりけり乃叙

やけしぬるところの人大仏殿にて千七
百よ人山階寺にて七百よ人ある御堂にて三百
よ人あるはかうよハ二百人のられ日よくらく
かうへうたれハそうして一万二千三百よ人
とうきこうし戦場にてうたれし所れ大衆
七百よ人内四百人のくびをハ法花寺のとりゐ
のまへにかけてのこりのこるところ三百よ人の
くびをハ般若のかとその外によられくびも

かくありけるとかや
十九日しけひらのあそん南都をほろぼして
京へかへり入らる入道相国一人ぞいきと
ほりはれく悦給るそれもあはく大かん
やけ給ふる事をに歎給ふあさましとそするう
あり八追善一院新院摂政殿下大臣公
卿ともしめたてまつりてそうしも前後を
わきまへぬはかりの人ハこハいふよし侍るす

そのあく僧をとりうしなふとも此ハかり流
かうんとこそやきはらはんとしけれは備前
なりともうかゝりしひあひ給ける流浪のかう
へとも大海をわたりてこそりんにかけらるゝ
きはくありけるの東大興福れやけにける
あさましさよわさすまらすさかしこの
みちやかりよろなけへられなりける穀倉院の
ものかりをはなしかへしれかりへそうつさ

てけるとこそうけたまはりしに聖武天皇のかき
をかせ給ひける東大寺の碑文云吾寺興復せハ
天下も興復せん吾寺衰微せハ天下も衰
微せんとなりしいまは灰燼となりぬるうへは国土
の滅亡うたかひなしとそかなしひあひける
左少弁行隆先年八幡に参りて通夜せられ
たりける夜の示現に東大寺奉行の時は
これをもつへしとて笏をたまはるとみて

うらおもてひくらはに御うたありけりし
きるにおほしてこの志やくをとて下向した
まひけれとも當時の事にてハ末なる遊覧
せらるゝ事あるへきと心中におもひ給ひく
二月をかぎり給ひてこの焼失ののち
大佛殿造営の沙汰ありける時弁官のうちに
この行隆忽られて奉行たるへきよし仰
せくださるそのときに行隆のよろこひけれは

不蒙勅勘して治承にもとのれれにましけり
ハいまして弁官にそハなさる仰しかも年を
過してハいまは弁官になりて奉行の年にあ
ふはこれとも先世の宿縁なるらね事にと
悦給く八幡大菩薩たまはり給ひし志やくを
とりいたして大佛殿造営の事ともしける日
よりかうかうれさりけれはありかたかりけれ